

水平社設立100年まで、あと2年 ～県内の水平社運動のあけぼの

○「京都をめざして」容易ではなかった創立大会への参加・水平運動の展開

水平社創立大会は、1922年3月3日、京都市岡崎公会堂でおこなわれ、滋賀県から10数名の人たちが参加しました。

現在の彦根市から、水平社創立大会に参加した際の話が伝わっています。「きびしい警戒のなか、近くの駅には何人もの警官がにらんでいるので、汽車に乗ることができなかった。仕方がないので、線路づたいに歩いて行って京都行きの汽車の乗ることができた。」「京都駅でも警官が見張っているということで、山科駅で汽車を降りて、岡崎まで歩いて行った。」



京都市岡崎旧公会堂

当時の政府や警察は、全国的な規模の大衆運動を危惧して、水平運動を押さえようとしてきました。しかも、「水平社」を名乗るだけで弾圧を受けた時代でした。

他の県内の指導者に対しても、常に警官が尾行し、行動を監視されました。この時代を生きた指導者が、のちに「戦前十数年の水平運動中に、100回くらい警官にとらえられて留置場に入れられた。」と語ったということです。

○滋賀県で初めての全国水平社支部大会の開催

部落の寺院の住職のもとで勉学に励む甲賀の8名の若者たちが、京都で商いをしている方から水平社創立大会の情報を聞き、「部落の差別をはね飛ばすために、そろって出かけようではないか」との思いから、一同で参加しました。

「きびしい差別があった学校を途中でやめ、そのかわりに部落の寺の住職に学問を教わっていた」という、差別の屈辱を感じていた8名の若者たちの水平社創立大会での感銘が、滋賀県内初めての水平社設立の原動力になりました。

8名の若者たちは、差別をなくすための大会を実現するため、多くの方と交渉をすすめていきました。水平社創立大会から約2年後の1924年4月18日、滋賀県で初めての水平社大会が、巖浄寺（現甲賀市）の本堂で開かれました。

ものものしい警戒のなかで、約150名の参加者が集まり、無事大会を成功させました。

当時のようすについて、「大会を成功させることができたのは、8人の若者の心の底に、差別の屈辱の怒りが、火の玉となって燃えていたからです。死んでも、大会は必ず成功させるというど根性を、8人ともみんながもっていた。」という話が伝わっています。



きびしい警戒や弾圧のなかで、水平運動は「人の世に熱を与え、光を与える」崇高な運動として社会に広がり、差別をなくすための活動や教育を積み重ねてきた事実があります。

今、私たちが生活をいとなく社会は、未知の新型コロナウイルスによる感染症の収束がまだ見とおせない、きびしい状況にあります。今後も、不安や恐怖からくる偏見や排除などの差別事象がより懸念されます。

このような世相だからこそ、「人間だれをも尊敬し、大切にす差別のない社会」の実現をめざした100年前の運動から、今ある人権課題との向き合い方を考えてみたいと思います。

資料出典 巖浄寺での水平社創立大会の様子が描かれたイラスト（小久保信蔵筆／甲賀市かえで会館で展示）
参考文献 『復刻 滋賀の部落 下冊』滋賀県部落史研究会編 財団法人滋賀県同和問題研究所発行
『広野町史』広野町史編集委員会編 広野町史編纂委員会発行